



若々しさと老練さが生む指揮のダイナミクス 鈴木優人、満を持して初登壇！

さまざまな方向から「まっとうな音楽」に迫る

「楽譜から読み取る内容は同じです」。

古楽オーケストラとモダン・オーケストラのいずれでもその手腕を発揮する指揮者・鈴木優人に、両者で同じ曲を演奏する場合、どんな違いがあるか尋ねてみた。答えはくだんの通り。表現すべき作曲家のメッセージは同じ。それをそれぞれに適した方法で現実化していく。答えにはそんな意が込められている。

古楽器対モダン楽器といった対立はすでに、過去のものとなった。あるのはただ、まっとうな音楽かそうでないかのふたつ。まっとうな音楽にいたるため、鈴木はさまざまな方面からアプローチする。鍵盤楽器奏者としての横顔がもっとも知られているところだろう。作・編曲家として作品そのものの内実に触れることもある。ときには演奏会や音楽祭の制作者として忙しうたち働く。指揮者を含む多彩なキャリアに対して、時間なり精力なりの資源をどのように配分しているのか。こちらも答えは明確だった。

「仕事の配分は考えていません。目の前のことをやり抜くだけです」。

目前の課題を順に乗り越えるだけで、これほど多様な関わり方を生み出すのだから、本人のバイタリティは並ではない。小学6年生のときにフルートに入れ込んだのも、その表れのひとつだろう。両親ともに音楽家。望むと望まざるとに関わらず、家庭は音楽であふれていた。それ

今月のマエストロ

鈴木優人

Masato Suzuki

文◎澤谷夏樹 | Natsuki Sawatani

に飽き足らず鈴木は、自分のしたい音楽を積極的に獲得しようとする姿勢を持っていた。フルートはその象徴だった。

「生まれて初めて自発的に音楽がしたい、フルートが吹きたいと強く思いました」。

300年を超えて編む、キリストの物語

育った環境の充実度と、それに輪をかけて大きい本人のバイタリティ。そんな音楽家としての鈴木は個性が、このたびの演目にも表れている。旧約聖書の世界(プロッホ《ソロモン》)から、カトリック圏の音楽(メシアン《忘れられたささげもの》、コレリ《クリスマス協奏曲》)を経て、ルターの宗教改革(メンデルスゾーン《交響曲第5番》)へ。キリストの生誕を待ち望む待降節のはじめに、聖書やクリスマスにまつわる曲を集めたのは、育った環境に起因していよう。18世紀初めのコレリから、20世紀初めのメシアンやプロッホの作品までを盛り込んだプログラムは、200年の音楽史を超える(今回演奏する瞬間まで含めれば300年超)。本人の積極性が、こうした弾力のある組み合わせを生んだ。

鈴木はこれまで、年齢に比してたくさんの経験を積んできた。その豊富な経験が、練られた音楽性につながっている。たとえば、このたびの《クリスマス協奏曲》は、ホールの大空間に合わせて楽器編成などに工夫を凝らした鈴木優人版での演奏。老練の眼差しで状況を把握し、

若々しく情熱的な仕事ぶりでその場に適した音楽を生み出す。一見、相反する性質が、指揮のダイナミクスを生む。NHK交響楽団では初の指揮台ながら鈴木は、そんなダイナミクスを存分に発揮してくれるだろう。

[さわたになつき／音楽評論家]

プロフィール

指揮者、作曲家、ピアニスト、チェンバリスト、オルガニスト。活躍の場は多岐にわたる。NHK交響楽団の演奏会に集う聴き手にとっては、サン・サーンス作品(2019年5月)やコーブランド作品(2018年11月)のオルガン独奏者としての顔が、もっとも馴染み深いだろうか。演奏する音楽もまた幅広い。中世・ルネサンスから21世紀まで、さまざまな時代の作品に意欲的に取り組む。その取り組み方も多様だ。あるときは音楽家として、あるときは制作者として、あるときは演出家として、あるときはトレーナーとして、そのときどきの課題と向き合っている。1981年オランダ生まれ。東京藝術大学音楽学部作曲科、同大学院音楽研究科器楽専攻古楽分野を経て、オランダのハグ王立音楽院修士課程オルガン科、即興演奏科を修了した。2005年にアンサンブル・ジェネシスを結成。時代を超えた作品群をオリジナル楽器で演奏している。近年はエグゼクティブ・プロデューサーとして調布国際音楽祭の先頭に立つ。2018年9月にはパツハ・コレギウム・ジャパンの首席指揮者に就任。足場となる古楽でも、その手腕を遺憾なく発揮する。[澤谷夏樹]

鈴木優人が指揮する
プログラム詳細はこちら

PROGRAM A ▶ P. 15



スペイン期待の星がN響定期に初登場 作品の個性を鮮やかに引き出す

細部に渡って表情豊かに歌わせ
グルーヴ感たっぷりに躍動させる

ポスト・ピリオド世代の指揮者の活躍が目立つ。彼らは、古楽から現代曲まで広汎なレパートリーを持ち、ピリオド奏法を目的化することなく、それが作品の個性を引き出すことにつねに心を配る。そこから出てくる音楽のなんと鮮やかで、みずみずしいこと。フランスのロト、ドイツのヘンゲルブロック、ギリシャのクルレンツィスといった指揮者だ。そして、スペインには、エラス・カサドがいる。

このグラナダ生まれの42歳がついにNHK交響楽団の定期公演に登場する。満を持して、といってもいい。

N響とは、2009年のサントリー・サマーフェスティバルで初共演している。シュトックハウゼンの《グルッペン》を振る3人の指揮者のうちのひとりだった。2011年にも再来日。Music Tomorrowでは尾高尚忠、デュティユー、西村朗の作品を取り上げ、他公演ではシベリウスの《交響曲第2番》を中心としたプログラムを披露した。当時は30代になったばかり。現代曲を得意にする才気走った若手指揮者というイメージだった。

それから10年近く。もじゃもじゃ頭の青年は、今はヒゲの目立つ精悍な顔立ちに。そのあいだに、指揮者としての知名度も急速に高まった。フライブルク・バロック管弦楽団を指揮、シューマンやメンデルスゾーンの録音を多数リリース、

今月のマエストロ

パブロ・エラス・カサド

Pablo Heras-Casado

文◎鈴木淳史 | Atsumi Suzuki

その型にはまらぬ愉悦的なパフォーマンスが評判を呼んだ。世界各地のオーケストラにも客演、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団やウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の指揮台も経験済みだ。

エラス・カサドは、オーケストラを細部に渡って表情豊かに歌わせ、グルーヴ感たっぷりに躍動させる。明るめの色彩感に、踊り出す内声部。まさしく、ラテンのノリ。

さらに、響きを作り出す感覚もずば抜けて優れている。小気味いいリズムで全体に敏捷な動きを与えつつも、音を柔らかかに重ね、官能性をふわりと香り立たす。

風通しがよく、愉悦的な音楽 しなやかに歌うチャイコフスキーに期待

今回、彼が取り上げるのは、ロシア音楽を中心にしたプログラムだ。

リムスキー・コルサコフの《スペイン奇想曲》は、スペインの民謡や舞曲をもとに華麗な管弦楽曲に仕立てた作品。スペインをモチーフにしたロシア作品をスペイン人が指揮するという構図も面白い。沸き立つような感興が期待できそうだ。

リストの《ピアノ協奏曲第1番》では、ロシアの新鋭ハリトーノフをソリストに迎える。2015年のチャイコフスキー国際コンクールで第3位入賞した期待の20歳だ。この洗練されたテクニックを発揮するピアニストを鮮烈なリズムで盛り立ててくれるのではないか。

後半は、チャイコフスキーの《交響曲第1番

「冬の日の幻想」】。この曲、エラス・カサドにはセントルークス管弦楽団との録音がある。ラテン的な風通しがよく繊細なバランスのなかで、曲中ふんだんに盛り込まれたロシア民謡を切々と歌わせていたのが印象的だった。機能性豊かなN響との共演では、さらにしなやかに弾力性のあるチャイコフスキーを聴かせてくれるに違いない。

[すずき あつふみ／音楽評論家]

プロフィール

バロックから最新作まで、広汎なレパートリーを時代に応じたスタイルを踏まえて的確、かつ愉悦的に表現する、もともと現代的なセンスをもつ指揮者のひとり。

スペインのグラナダ生まれ。2007年ルツェルン音楽祭の指揮コンクール優勝、2011年にモネ劇場で細川俊夫の《歌劇「松風」》を世界初演した。また同年から6年間、セント・ルークス管弦楽団の首席指揮者を務めつつ、各地のオーケストラに客演するほか、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団にもデビューした。2014年には『ミュージカル・アメリカ』誌のコンダクター・オブ・ザ・イヤーに選出された。2019年から、首席客演指揮者を務めるマドリッド・レアル劇場でワーグナーの《ニーベルングの指環》チクルスも始まるほか、今シーズンはベルリン国立歌劇場にも登場予定。地元のグラナダ国際舞踊音楽祭の音楽監督を務める。ピリオド楽器のオーケストラ、フライブルク・バロック管弦楽団との関係も深く、シューマンやメンデルスゾーン作品の録音は高く評価されている。[鈴木淳史]

パブロ・エラス・カサドが
指揮するプログラム詳細はこちら

PROGRAM B ▶ P. 20



世界に活躍の場を広げる若き俊英 ラテンの熱が感じられる表情豊かな音楽

巨匠に見出された才能
オーケストラ、オペラの両分野で活躍

ディエゴ・マテウスは、まだ35歳の若さながら、すでにオーケストラ、オペラの両方で国際的に活躍している。ポーランドのモーツァルト管弦楽団の首席客演指揮者、フェニーチェ歌劇場の首席指揮者、メルボルン交響楽団の首席客演指揮者を歴任。昨年から今年にかけては、トリノ王立歌劇場でヴォルフ・フェラーリ《スザンナの秘密》とプーランク《人間の声》、ペーザロ・ロッシーニ音楽祭でロッシーニ《アディーナ》、アン・デア・ウィーン劇場でのロッシーニ《ウィリアム・テル》、リスボンのサン・カルロス歌劇場でプッチーニ《ボエーム》、フィレンツェ歌劇場でプッチーニ《蝶々夫人》などのオペラを指揮した。日本では、これまでにサイトウ・キネン・オーケストラ、NHK交響楽団、読売日本交響楽団に客演している。

ベネズエラ独自の音楽教育システム「エル・システム」で音楽を学ぶ。シモン・ポリバル交響楽団の前身、シモン・ポリバル・ユース・オーケストラのコンサートマスターを務めたのち、指揮者に転身し、クラウドイオ・アバドにその才能を認められた。

筆者が彼の演奏を初めて聴いたのは2011年8月、サイトウ・キネン・オーケストラの演奏会であった。そのときはチャイコフスキーの《交響曲第4番》がメインだったが、27歳のマエストロとは思えない、オーケストラを十分に鳴らし

今月のマエストロ

ディエゴ・マテウス

Diego Matheuz

文◎山田治生 | Haruo Yamada

た堂々たる演奏に感心した記憶がある。その後、サイトウ・キネン・オーケストラには2014年、2018年、2019年に客演した。CDにもなっている2018年のチャイコフスキー《交響曲第5番》でも、若々しい演奏を繰り広げながら、勢いだけでなく、テンポを巧みに伸縮させ表情豊かに作品を描いている。NHK交響楽団とは2013年3月に初共演。2015年11月には定期公演に登場し、チャイコフスキーの《交響曲第5番》やマーラーの《リュッケルトの詩による5つの歌》などを披露した。

ゴージャスに鳴らされる 《幻想交響曲》に期待

彼はチャイコフスキーに対して、特別な思い入れがあるのだろう。これまで日本での多くのコンサートでチャイコフスキーの交響曲を取り上げてきたが、実は、モーツァルト、ロッシニ、ヴェルディ、プッチーニ、マーラー、ショスタコーヴィチ、プロコフィエフを得意とするなど、レパートリーは多彩。

今回は、ベルリオーズの《幻想交響曲》をメインに据えるということで期待を寄せたくなる。マテウスの演奏にはラテン的な熱が感じられ、彼はオーケストラをゴージャスに鳴らす術も心得ている(セイジ・オザワ松本フェスティバルでのガーシュウィン作品の演奏が印象に残っている)ので、どんな《幻想交響曲》を聴かせてくれるのか楽しみだ。ベルリオーズ没後150周年の最後を飾る鮮

やかな演奏となるだろう。前半のグラスノフ《ヴァイオリン協奏曲》ではロシア音楽との相性の良さを示すに違いない。

[やまだ はるお／音楽評論家]

プロフィール

1984年生まれ。ベネズエラのパルキシト出身。グスターボ・ドゥダメルを世に出したことで知られる同国独自の音楽教育システム「エル・システマ」で育つ。ヴァイオリンを学び、シモン・ポリバル・ユース・オーケストラ(現シモン・ポリバル交響楽団)のコンサートマスターを務める。その後、指揮者に転身。クラウドイオ・アバドに才能を見出され、2009年、彼が創設したボローニャのモーツァルト管弦楽団の首席客演指揮者に就任。2011年から2015年までフェニーチェ劇場の首席指揮者を、2013年から2016年までメルボルン交響楽団の首席客演指揮者を務めた。

これまでに、ロサンゼルス・フィルハーモニック、フィルハーモニア管弦楽団、イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団などのオーケストラを指揮。オペラでは、ベルリン国立歌劇場、ベルリン・ドイツ・オペラ、トリノ王立歌劇場、ペーザロ・ロッシニ音楽祭などに客演。日本では、2011年からたびたびサイトウ・キネン・オーケストラを指揮している。NHK交響楽団とは、2013年3月に初共演。その後、2015年11月の定期公演に登場している。[山田治生]

ディエゴ・マテウスが指揮する
プログラム詳細はこちら

PROGRAM C ▶ P. 24

PROGRAM

A

第1927回

NHKホール

11/30 土 6:00pm

12/1 日 3:00pm

指揮／チェンバロ● | 鈴木優人 | 指揮者プロフィールはp.10

チェロ | ニコラ・アルトシュテット*

コンサートマスター(客演) | ヴェスコ・エシュケナージ◆

◆ヴェスコ・エシュケナージ:1970年、ブルガリア生まれ。ロンドンのギルドホール音楽院を1992年に修了。2000年よりロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団のコンサートマスターに就任。リュドミル・アングロフ(ピアノ)とのデュオでも活躍する。N響では2011年11月に初めてゲスト・コンサートマスターを務めて以来、共演を重ねている。

メシアン

忘れられたささげもの[11']

ブロッホ

ヘブライ狂詩曲「ソロモン」* [20']

— 休憩(20分) —

コレッリ(鈴木優人編)

合奏協奏曲 第8番 ト短調

「クリスマス協奏曲」* [13']

I ヴィヴァーチェ—グラヴェー—アレグロ

II アダージョ—アレグロ—アダージョ

III ヴィヴァーチェ

IV アレグロ—パストラレ:ラルゴ

メンデルスゾーン

交響曲 第5番 二短調 作品107

「宗教改革」(初稿/1830) [28']

I アンダンテ—アレグロ・コン・フォーコ

II アレグロ・ヴィヴァーチェ

III アンダンテ

IV アンダンテ・コン・モート—アレグロ・ヴィヴァーチェ—アレグロ・マエストーソ

Artist Profile

ニコラ・アルトシュテット(チェロ)



美しい音と柔軟な技巧を持ち、指揮者や芸術監督としても活躍する多才な音楽家である。ドイツ系とフランス系のルーツを持つ家庭に生まれ、ボリス・ベルガメンシコフに師事。この高名なチェリストの最後の弟子のひとりとなった。2010年クレディ・スイス・ヤング・アーティスト賞を受賞し、ルツェルン音楽祭にてドゥダメル指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団と共演。以後、カーネギー・ホール、ウイグモア・ホールをはじめとする著名

ホールでのリサイタルや室内楽、ノリントン、マリナー、アシュケナージなどが指揮する一流オーケストラとの共演を重ね、2018-19シーズンには、NDRエルブフィルハーモニー管弦楽団のアーティスト・イン・レジデンスを務めた。2012年クレームルの後任としてロッケンハウス音楽祭の芸術監督に就任。2014年からはハイドン・フィルハーモニーの芸術監督を務め、2018年の日本公演でも生気に富んだ快演を披露した。

N響とは今回が初の共演。

[柴田克彦／音楽評論家]

Program Notes | 星野宏美

本日の4つの演奏曲目は、いずれも宗教的内容を孕む点で共通する。20世紀フランスの知的なカトリシズム、移민국アメリカで好評を得たユダヤ民族音楽、イタリア・バロックのクリスマス音楽、19世紀ドイツの同化ユダヤ人によるプロテスタンティズムという、非常に多様な宗教性がシンフォニー・コンサートのプログラムに並ぶのは、まさにグローバル時代の反映とも言える。1年の締めくりに音楽を通して平和への思いを共有したい。

メシアン

忘れられたささげもの

20世紀フランスを代表する作曲家オリヴィエ・メシアン(1908~1992)の創作を生涯にわたって貫いたのは、カトリック信仰であった。「交響的瞑想」という副題をもつこの初期作品もまた例外ではない。「忘れられたささげもの」というタイトルの意味するところは、初版楽譜に掲げられたメシアン自身によるフランス語序文に示唆されている(以下、斉藤恵訳)。

死に向かい悲しげに、十字架に掛けられた腕は伸び、あなたの血は流れる。

私たちを愛して下さる、優しきイエスよ、私たちはそのことを忘れていた。

蛇の狂気と毒に駆られて、息を切らして休むことなくひたすら走り、

あたかも墓に入るかのように、私たちは罪に向かって落ちていった。

ここには清純な食卓、慈悲の泉、清貧の宴、命と愛のパンを供えた崇めるべき慈愛がある。

私たちを愛して下さる、優しきイエスよ、私たちはそのことを忘れていた。

音楽は序文と対応して、緩・急・緩の3部分からなる。第1部〈十字架〉では、弱音器付きの弦楽器群の「呻き声」¹により、「痛ましく、深く悲しく」¹十字架上のイエス・キリストが想起される。第2部〈罪〉では、弦やホルンの「グリッサンド」²と金管の「鋭い叫び」²に

より「激しく、絶望的に、喘ぐように」¹、罪が「深い淵へと疾走する」²さまが表される。第3部〈^{せいさん}聖餐〉では、緩やかな旋律が「遠いスタンドグラスのように輝きながらたち昇り」²、パンと葡萄酒によりキリストの死と復活を記念する秘蹟が「大いなる憐れみと大いなる愛をもって」¹瞑想される。

* 「¹」は初版楽譜から、「²」はメシアンによる後年の自作解説から引用

作曲年代	1930年
初演	1931年2月19日、パリのシャンゼリゼ劇場にて、ワルター・ストララムの指揮、ストララム管弦楽団による
楽器編成	フルート3、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン1、クラリネット2、バス・クラリネット1、ファゴット3、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニ1、大太鼓、トライアングル、シンバル、サスペンデッド・シンバル、弦楽

ブロッホ

ヘブライ狂詩曲「ソロモン」

エルネスト・ブロッホ(1880~1959)はスイス出身のユダヤ人作曲家。1916年にアメリカに渡り、名声を確立した。後期ロマン派的な豊潤な響きとヘブライ要素を融合させた彼の作風が、ユダヤ人亡命者の増加するアメリカで好評を得たのは必然とも言える。

《ヘブライ狂詩曲「ソロモン」》は、渡米直前に作曲された。それ以前よりブロッホは、ユダヤ教の聖典(同時にキリスト教の旧約聖書)の一書である『コヘレトの言葉』を題材にバリトンとオーケストラ用の作曲を試みていたが、ふさわしい言語を見出せず、行き詰まっていた。ロシア系ユダヤ人チェリストのアレクサンダー・バルヤンスキーとその妻と出会い、心暖まる親交を重ねるうちに、ブロッホは声楽のかわりにチェロを用いることを思いつく。彼がバルヤンスキーの助言を求めつつ作曲を進める傍ら、バルヤンスキーの妻はソロモン王の蠟人形を製作し、ブロッホに贈った。かくして、完成した作品は「ソロモン」と名付けられ、バルヤンスキー夫妻に献呈された。

紀元前10世紀のイスラエル王ソロモンは、神から非常に豊かな知恵と広い心を授けられ、王国に繁栄をもたらした。「知恵も知識も、快樂も労苦も、才能も富も、名誉も長寿も、どれもみな空しい」と説く『コヘレトの言葉』は、知恵王ソロモンに遡るとされている。

作品は、独奏チェロによるカデンツァ風の序奏で開始する。その後、自由な形式で途切れなく進むが、大きく3部分に分けられる。第2部では、ブロッホの幼少期に父が唱えていたというユダヤ聖歌がオーボエによって奏でられ、展開される。半音階や下行音型の多用、増2度音程の効果的使用が、オリエンタルな異国情緒を醸しだし、ハーブやチェレスタ、種々の打楽器も含んだ大編成のオーケストラによる情動的なクライマックスは、古代イスラエルを舞台としたスペクタクルな映画音楽のよう。「すべては空しい」という『コヘレトの言葉』は、第1次世界大戦中の世界共通の深遠なる声でもあったろう。

作曲年代	1916年1～2月
初演	1917年5月3日、ニューヨークのカーネギーホールにて、アーサー・ボダンスキの指揮、ハンス・キンダーの独奏、ニューヨーク・フィルハーモニックによる
楽器編成	フルート3(ピッコロ1)、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン1、クラリネット2、バス・クラリネット1、ファゴット2、コントラファゴット1、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニ1、シンバル、サスペンデッド・シンバル、タンブリン、タムタム、大太鼓、小太鼓、ハープ2、チェレスタ1、弦楽、チェロ・ソロ

コレリ(鈴木優人編)

合奏協奏曲 第8番 ト短調「クリスマス協奏曲」

イエスの誕生は、羊飼いたちに最初に告げ知らされた。ベツレヘム近くで野宿をしながら羊の群れの番をしていた彼らは、真夜中に天使のお告げを聞いて、救い主を拝みに行こうと急ぎ、馬小屋の飼い葉桶おひに寝かせてある乳飲み子イエスを探し当てた。

アルカンジェロ・コレリ(1653～1713)の《クリスマス協奏曲》は、新約聖書に記されているキリスト降誕のこの情景を、厳かながら優しく牧歌的な雰囲気に結びつけた不朽の名作である。バッハ、ヘンデルより32歳年長で、ローマを中心に活躍した彼は、イタリアで当時、楽器として頂点に達したヴァイオリン属の魅力を最大限に引き出し、バロック期の器楽曲の形式を確立した。

《クリスマス協奏曲》は合奏協奏曲集の中の1曲で、弦楽トリオ(独奏ヴァイオリン2人、独奏チェロ1人の3声)と弦楽オーケストラ(ヴァイオリン2部、ヴィオラ、チェロとコントラバスによるオクターヴ重複の4部)に、通奏低音を加えた編成による。本日は、鈴木優人氏がN響との共演のためにオーボエ2パートとファゴット1パートを加えて編曲した稿が用いられる。この曲全体は、4楽章構成の拡充と捉えられよう。ト短調による第1楽章(ヴィヴァーチェ・グラヴェー・アレグロ)では、初しよ端から急・緩・急とテンポが交代し、変ホ長調による気高い第2楽章(アダージョ・アレグロ・アダージョ)も、急いた中間部を挟む。ト短調に戻った第3楽章(ヴィヴァーチェ)は、3拍子の舞曲風。続く第4楽章(アレグロ・ラルゴ)もト短調で始まるが、後半はト長調の「パストラレ」になる。イタリア語の「羊飼い Pastore」を語源とするパストラレは、8分の12拍子のリズム、たおやかな旋律、3度並行、羊飼いの笛を模して音を長く引き延ばすドローンなどを特徴とした素朴な音楽。荘重な教会様式を軸に、華麗な宮廷様式とさらには民衆的な音楽を交え、実に変化に富んだ構成となっている。

作曲年代	詳細不明
初演	詳細不明。コレリ没後の1714年に《合奏協奏曲集》の中で出版。1680～1690年頃、ローマで演奏されていたとも言われる
楽器編成	コンチェルティーノ(ヴァイオリンⅠ・Ⅱ、チェロ)、オーボエ2、リビエーノ(ヴァイオリンⅠ・Ⅱ、ヴィオラ)、通奏低音(チェロ、コントラバス、ファゴット1、チェンバロ1、オルガン1)

メンデルスゾーン

交響曲 第5番 二短調 作品107「宗教改革」(初稿/1830)

フェリックス・メンデルスゾーン・バルトルディ(1809~1847)の5曲の交響曲のうち、《第5番》はこれまで通好みの作品と見なされてきたが、2017年の「宗教改革500年」を機に注目を浴び始めた。この作品の成立は、1517年のルターの「95箇条の論題」ではなく、メランヒトンが起草し、カトリック諸侯の承認を求めて1530年6月25日に帝国議会に提起した「アウクスブルク信仰告白」と関連している。教義の体系化に終始せず、対立の調停を図ったこの信仰告白は、300年後のドイツ・プロテスタント圏、なかでも宗教的寛容政策を掲げるプロイセンにおいて重要視され、王都ベルリンにて盛大に祝われた。

メンデルスゾーンは、作曲を始めた1829年から一貫して「宗教改革交響曲」という言い回しを使っており、アウクスブルク信仰告白300年祭での演奏を意図していた。ベルリン屈指のユダヤ系エリート一族に生まれ育ち、7歳の時にプロテスタントの洗礼を受けた彼にとって、この祝祭は重要な関心事であり、強い意欲をもって作曲に臨んだことは想像に難くない。しかし実際には、他の作曲家に祝祭用の合唱曲が委嘱され、メンデルスゾーンの交響曲は本来の演奏機会を逸してしまった。1832年11月になってようやく初演にこぎ着けるも、その反響は芳しくなかった。背景に、彼のユダヤ出自に対する周囲の反感を指摘する説もあるが、真相は明らかでない。

作品は4つの楽章からなり、第1、第4楽章で教会的な雰囲気強く醸し出されるのが特徴である。第1楽章の序奏(アンダンテ)は、対位法的な古様式で開始し、終盤に「ドレスデン・アーメン」が引用される。ワーグナーの《パルシファル》の聖杯のモチーフとしても知られるこのアーメン唱は、ドレスデンの宮廷礼拝堂や聖十字架教会の礼拝内で実際に歌われていたもの。序奏全体はオルガンの響きを思わせる。急速で熱烈な第1楽章主部(アレグロ・コン・フォーコ)に、第2楽章(アレグロ・ヴィヴァーチェ)の軽やかなスケルツォ、美しい旋律を歌い、語るような第3楽章(アンダンテ)が続いた後、第4楽章冒頭(アンダンテ・コン・モート)で、ルター作詞作曲による有名なコラール《神はわがやぐら》が鳴り響く。コラールはその後、フガートとして展開され(アレグロ・ヴィヴァーチェ)、ソナタ形式による第4楽章主部(アレグロ・マエストロ)にも組み込まれていく。初演に居合わせた高名な神学者シュライエルマッハーは、荘厳なコラール吹奏を耳にして、その場で起立したという。

なお本日はホグウッド校訂ベーレンライター版の初稿(1830年稿)が用いられる。現行版(1832年稿)との大きな違いは、フルートによるレチタティーヴォが第4楽章を導く点である。

作曲年代	1829~1830年、その後、初演まで改訂
初演	1832年11月15日、ベルリンのジグア카데미(合唱協会)のホールにて、作曲家自身の指揮による
楽器編成	フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット1、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、セルバン1(今回はチューバで演奏)、ティンパニ1、弦楽

B

第1929回

サントリーホール

12/11 水 7:00pm

12/12 木 7:00pm

指揮 | パブロ・エラス・カサド | 指揮者プロフィールはp.12

ピアノ | ダニエル・ハリトーノフ

コンサートマスター | 伊藤亮太郎

リムスキー・コルサコフ

スペイン奇想曲 作品34 [15']

- I 朝の歌
- II 変奏曲
- III 朝の歌
- IV 情景とロマの歌
- V アストゥリアのファンダンゴ

リスト

ピアノ協奏曲 第1番 変ホ長調 [19']

- I アレグロ・マエストーソ
- II クワジ・アダージョ
- III アレグレット・ヴィヴァーチェ
- IV アレグロ・マルツィアーレ・アニマート

— 休憩 (20分) —

チャイコフスキー

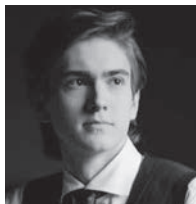
交響曲 第1番 ト短調 作品13

「冬の日の幻想」 [44']

- I 冬の旅の幻想:アレグロ・トランクイロ
- II 憂鬱の地、霧の地:アダージョ・カンタービレ・マ・ノン・タント
- III スケルツォ:アレグロ・スケルツァンド・ジョコーソ
- IV 終曲:アンダンテ・ルグブレ
—アレグロ・マエストーソ

Artist Profile

ダニエル・ハリトーノフ (ピアノ)



ロシアの極東サハリン州生まれ、20歳の俊英ピアニスト。2015年、16歳という若さで臨んだ第15回チャイコフスキー国際コンクールにて第3位に輝き、一躍世界中から脚光を浴びた。すでに14歳でフレリー・ゲルギエフ指揮マリンスキー劇場管弦楽団との公演でデビューを果たしており、同年にはカーネギー・ホールでの国際音楽祭ガラ・コンサートでのデビューも飾る。チャイコフスキー・コンサートホールやモスクワ音楽院大ホールなど、ロシア国内の著名なホールでリサイタルを行うほか、フランスはアヌシーでの音楽祭

等にも出演。これまでにロシア・ナショナル管弦楽団、チャイコフスキー交響楽団(旧モスクワ放送交響楽団)、ウクライナ国立交響楽団、モスクワ・フィルハーモニー管弦楽団といったロシアの主要オーケストラのほか、中国フィルハーモニー管弦楽団、広州交響楽団、ブラジルのサンパウロ市交響楽団と共演。2019年4月にはフィルハーモニア管弦楽団と共演、好評を博した。日本では2015年よりリサイタルを行う。N響とは今回が初共演。

[飯田有抄／クラシック音楽ファシリテーター]

Program Notes | 野本由紀夫

今回のプログラムは、ロシアゆかりの作曲家が、新しい音楽を切り開こうとした作品が並んでいる。ロシア五人組の作曲家でありながらも、スペイン民謡をもとにオーケストラの可能性を見事に開花させたリムスキー・コルサコフ(1844~1908)。ロシアへ演奏旅行した帰りに生涯の伴侶と出会い、その助言で作曲家として転身したリスト(1811~1886)。帝政ロシア法務省の官吏の地位を投げ打って音楽に専念したチャイコフスキー(1840~1893)。彼らの挑戦的な意欲作なのだ。

リムスキー・コルサコフ

スペイン奇想曲 作品34

ニコライ・リムスキー・コルサコフが指揮者としても活躍していた、1887年(43歳)の管弦楽曲。5つの楽章はスペインの民謡にもとづくが、そのメロディはスペインの作曲家ホセ・インセンガ(1828~1891)が編纂した《民謡集「スペインの響き」》から取られた。ヴァイオリンをはじめ、多くの楽器が華麗なるソロを聴かせるほか、ハープや打楽器の活躍など、翌年に生まれる《交響組曲「シェエラザード」》(作品35)との関連性をあちこちに感じさせる作品である。

出版された楽譜には、初演時の管弦楽団員、全67人の名前が記されている。初演で熱狂的に称賛してくれた楽団員に対する、作曲家からのお礼であろう。

5つの部分は、切れ目なく演奏される。朝の歌(アルボラダ):恋人たちの朝のセレナード。クラリネット・ソロが華やかである。変奏曲:ホルン四重奏により静かな主題が示されると、5つの変奏曲がつづく。イングリッシュ・ホルンとフルートのソロも聴きどころ。朝の歌(アルボラダ):第1曲の再現だが、今回はヴァイオリンがソロを担う。情景とロマの歌:アンダルシアのロマの女性が歌い踊る様を描く。さまざまな楽器の独奏カデンツァが繰り広げられ、《シェエラザード》の第2曲〈克蘭ダー王子の物語〉をほうふつとさせる。アストウリアのファンダンゴ:カスタネットのリズムをとまなう、情熱的なスペイン民俗舞曲。最後に第1曲のメロディが変形して回帰してクライマックスを築く。

作曲年代	1887年夏
初演	1887年11月12日(旧ロシア暦10月31日)、サンクトペテルブルク第2回ロシア交響楽団演奏会にて、作曲家自身の指揮、マリンスキー劇場管弦楽団、
楽器編成	フルート2、ピッコロ1、オーボエ2(イングリッシュ・ホルン1)、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、テューバ1、ティンパニ1、大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、小太鼓、トライアングル、タンブリン、カ斯塔ネット、ハーブ1、弦楽

リスト

ピアノ協奏曲 第1番 変ホ長調

フランツ・リストは、ピアノ独奏とオーケストラ伴奏による作品を14曲作っているが、本作は《死の踊り》と並んでもっとも人気の高い協奏曲である。

すでに1832年(21歳)のころにはメイン・テーマがスケッチされているが、本格的に取り組んだのは、1846年になってから。翌年、キエフで運命の女性、カロリーネ・フォン・ザイン・ヴィトゲンシュタイン侯爵夫人と出会うと、ピアニストを引退し、彼女とワイマールに定住。同地の宮廷楽長となり、革新派の旗手となる。協奏曲は1849年にはひとまず完成を見るが、1855年の初演までに、さらに改訂が加えられた。その間リストは、ワーグナー(1813~1883)のオペラ《ローエングリン》の世界初演の指揮を行ったり、《レ・プレリュード》をはじめとする交響詩を生み出したりした。ピアノ協奏曲の初演は、リスト自身のピアノ独奏、ベルリオーズ(1803~1869)の指揮で行われた。作品はその後も改訂が続けられ、1856年にワイマールで完成を見る。

演奏効果も高い上に、まるで交響詩のような、非常に^{ちみっ}緻密に出来た傑作である。

第1楽章 ピアノ・ソロが派手に立ち回る、自由なソナタ形式の楽章。ピアノ演奏の視覚効果にもご注目。

第2楽章 優美な緩徐楽章。弱音器を付けた弦楽器群を背景に、オーケストラのソロ楽器とも対話を繰り返す。そのまま次の楽章へつづく。

第3楽章 気まぐれなスケルツォ(急速な3拍子の舞曲)の楽章。トライアングルが使われたことから、敵対していた音楽評論家ハンスリックが「トライアングル協奏曲」と揶揄した。しかし、彼が熱烈に擁護したブラームス(1833~1897)が《交響曲第4番》でトライアングルを使ったときには、ハンスリックは沈黙を守った。切れ目なく、次の楽章へ入る。

第4楽章 これまでに登場した主題や動機がオールスターキャストで現れる、自由な行進曲風の楽章。豪快に終幕を迎える。

作曲年代	1835~1856年、ワイマールで完成
初演	1855年2月17日、ワイマール、ベルリオーズの指揮、作曲家自身のピアノ独奏
楽器編成	フルート2、ピッコロ1、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ1、トライアングル、シンバル、弦楽、ピアノ・ソロ

交響曲 第1番 ト短調 作品13「冬の日の幻想」

チャイコフスキーが難産の末、生み出した最初の交響曲。19歳から彼は法務省に官吏として勤務していたが、1862年にアントン・ルビンシテイン(1829~1894)によって改組されたサンクトペテルブルク音楽院で、本格的に音楽を学び始めた。1865年(25歳)に同音楽院を卒業すると、彼は翌年からモスクワ音楽院で音楽理論の講師となった。

《交響曲第1番》は、音楽院卒業後、最初の作品である。かなり挑戦的であり、案の定、楽譜を見せたところ、彼の恩師ルビンシテインに酷評されてしまう。しかし、その弟ニコライに励まされて改訂を進め、第2稿の形で、1868年2月15日(ロシア暦3日)にモスクワにおいて、ニコライの指揮のもと初演にこぎつけた。とりわけ第2楽章が称賛されたという。

その後、1874年秋に再度手が加えられ、今日演奏される第3稿が完成した。第3稿は、1883年12月1日(ロシア暦11月19日)に、モスクワで、マックス・エルトマンズデルファーの指揮により初演された。

第1楽章〈冬の旅の幻想〉 冬のロシアの空気感を表すかのようなヴァイオリン群のトレモロを背景に、フルートとファゴットによって短調で第1主題が提示される。第2主題はクラリネットによって奏され、長調で暖かい。これらの主題によって、この楽章は紡がれていく。曲は最弱音で閉じられる。

第2楽章〈憂鬱の地、霧の地〉 静かなアダージョの緩徐楽章。弱音器を付けた弦楽合奏によって、まずロシア正教の賛美歌を思わせる祈りの音楽が奏される(序奏部)。オーボエ・ソロのメロディが主要主題で、フルートが彩を添える。副主題は、フルートとヴィオラがユニゾンでうたう憂愁を湛えたメロディだ。これらが交互に現れる。

第3楽章 急速な3拍子のスケルツォ楽章。1865年(25歳)に作曲したピアノ・ソナタの第3楽章を転用したもの。曲の終わり付近に、ティンパニが独奏風に伴奏する部分が出てくる。

第4楽章 凱旋的なソナタ形式の楽章。冒頭でファゴットが吹くメロディは、ロシア民謡《咲け、小さな花》である。これは南ロシアのカザンでの1861年の学生運動において、農奴解放の象徴歌だった。このメロディがさまざまに姿を変えて楽章を形成していく。最後は凱旋的に閉じられる。

作曲年代	1866年作曲。同年および1874年に改訂。1888年に楽譜を修正
初演	全楽章の初演は、1868年2月15日(旧ロシア暦3日)にモスクワで、ニコライ・ルビンシテインの指揮による
楽器編成	フルート2、ピッコロ1、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニ1、シンバル、大太鼓、弦楽

PROGRAM

C

第1928回

NHKホール

12/6 **金** 7:00pm

12/7 **土** 3:00pm

指揮 | **ディエゴ・マテウス** | 指揮者プロフィールはp.14

ヴァイオリン | **ニキータ・ボリソグレブスキー**

コンサートマスター(客演) | **ヴェスコ・エシユケナージ** | プロフィールはp.15

メンデルスゾーン

「夏の夜の夢」序曲 作品21 [12']

グラスノフ

ヴァイオリン協奏曲 イ短調 作品82

[21']

I モデラート

II アンダンテ・ソステヌート

III アレグロ

—— 休憩(20分) ——

ベルリオーズ

幻想交響曲 作品14 [50']

I 夢と情熱

II 舞踏会

III 野の風景

IV 断頭台への行進

V ワルプルギスの夜の夢

Artist Profile

ニキータ・ボリソグレブスキー (ヴァイオリン)



1985年、ロシアのヴォルゴドンスク生まれ。モスクワ音楽院でエドゥアルド・グラチとタチャーナ・ベルクリに師事。エリーザベト王妃音楽大学でオーギュスタン・デュメイに、クロンベルク・アカデミーでアナ・チュマチェンコに学ぶ。2007年、チャイコフスキー国際コンクールで第2位入賞。2010年、シベリウス国際ヴァイオリン・コンクール、および、クライスラー国際ヴァイオリン・コンクールで優勝。

これまでにマリンスキー劇場管弦楽団、ロシア国立交響楽団、ベルギー国立管弦楽団、ヘルシンキ・フィルハーモニー管弦楽団、ラハティ交響楽団、モスクワ・フィルハーモニー交響楽団などのオーケストラと共演。NHK交響楽団とは2017年7月にチャイコフスキーの《ヴァイオリン協奏曲》を共演している。2014年からは弦楽器とピアノの6名からなるルービック・アンサンブルのメンバーとしての活動も行う。デュメイ指揮シンフォニア・ヴァルソヴィアとのラロの《スペイン

交響曲》やニコライ・メトネルのヴァイオリンとピアノのための作品全集などの録音を残す。

[山田治生／音楽評論家]

Program Notes | 野平一郎

本公演は、序曲・協奏曲・交響曲という大変「伝統的」なオーケストラのためのプログラムに、ドイツ、ロシア、フランスと3つの異なる彩りをまとわせた興味深い構成である。またここに選ばれた作曲家は、3人とも歴史上オーケストラの音色表現に最も秀でていた人たちであるという共通項がある。ディエゴ・マテウスとN響の演奏を堪能したい。

メンデルスゾーン

「夏の夜の夢」序曲 作品21

シェークスピアの戯曲『夏の夜の夢』による。わずか17歳の手によるこの序曲は、早熟だったフェリックス・メンデルスゾーン・バルトルディ(1809~1847)の若き日の才能を、余すところなく伝え、表現、構成、管弦楽の扱いについての驚くべき巧みな技を見せている。《夏の夜の夢》は、人間(貴族のライサンダーとハーミアほか)と妖精(王様のオベロンと女王ティターニア、小妖精パックほか)がアテネ近郊の森の中で繰り広げる物語。メンデルスゾーンは特に音色の妙によって、こうした物語のさまざまな要素や登場人物、そして全体を被っている幻想的な雰囲気^{おほ}を表現している。冒頭の導入部分や随所に挿入される管楽器による和音、弦楽器のさざ波のような細かい音型、そしてトゥッティの輝かしい響き……まさにこの序曲の後、これらを基にしたオペラが展開するのではないかと思わせるような異なった音楽が、決して瞬間的でバラバラなものではなく相互に関係を保ち、ソナタ形式を基本とした堅固な形式感の流れの中に見事に活かされている。元々はやはり優れた作曲家・ピアニストであった姉のファニー・メンデルスゾーンとのピアノ四手連弾のために作曲されたものを、管弦楽化したものである。なお、後年この演奏会用序曲を冒頭に置く劇の付随音楽を作品61として作曲しているが、この中には有名な〈結婚行進曲〉が含まれている。

作曲年代	1826年
初演	1826年、ベルリンにあるメンデルスゾーン邸内のホール [公開初演]1827年、シュテッティン
楽器編成	フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、チューバ1、ティンパニ1、弦楽

ヴァイオリン協奏曲 イ短調 作品82

ロシアにおけるヴァイオリン協奏曲の先輩、チャイコフスキーに影響されたこの協奏曲は、作曲家としてのアレクサンドル・グラズノフ(1865~1936)絶頂期の作品である。そして華麗な演奏技法、凝った楽曲構成は《交響曲第8番》などにも共通するこの時期のグラズノフ特有のものである。

サンクトペテルブルクの裕福な出版業者の家庭に生まれたグラズノフも、またメンデルスゾーンに比較できる早熟な天才で、神童と言われ子供の頃からピアノの名手、そして作曲を試みた。作曲家としてだけではなく指揮者としても、また教育者としても素晴らしいキャリアを築いた人物である。リムスキー・コルサコフを継いでサンクトペテルブルク音楽院の院長に就任し、音楽院のカリキュラムの改善や体制の整理に尽力した。ショスタコーヴィチが弟子のひとりであったことはよく知られている。1928年以降ヨーロッパ、そしてアメリカ合衆国に渡り、パリで亡くなった。ストラヴィンスキーなど新しい世代の音楽を全く認めなかった超保守主義者としての一面も持ち合わせていたし、酒好きのエピソードにも事欠かない。ラフマニノフの《交響曲第1番》の初演の失敗は、酒を飲んだグラズノフが指揮はもちろん、リハーサルもきちんとできなかったのが原因だと言われているが、真偽のほどは定かではない。

モデラートとアレグロの2つの対照的な楽章の間に独奏カデンツァがある3部分構成。この3つの楽章が切れ目なく演奏される。第1楽章モデラート、イ短調。自由なソナタ形式。第2楽章アンダンテ・ソステヌート。ヴァイオリンの熟達した書式、そして高い演奏技術が見られる。第3楽章アレグロ、イ長調。ロンド形式による「狩の音楽」。途中にはヴァイオリンの独奏パートに民族楽器のバラライカを模した部分も現れる。

作曲年代	1904年
初演	1905年3月4日、サンクトペテルブルクのロシア音楽協会のコンサートにて、作曲家自身の指揮、レオポルト・アウアーの独奏
楽器編成	フルート3(ピッコロ1)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ2、グロッケンシュピール、トライアングル、シンバル、ハープ1、弦楽、ヴァイオリン・ソロ

ベルリオーズ

幻想交響曲 作品14

原題は「ある芸術家の生涯のエピソード、5部分から成る幻想的交響曲」。19世紀の作曲家は多かれ少なかれベートーヴェンの創作の影響下にあるが、エクトル・ベルリオーズ(1803~1869)も特に《英雄》《運命》交響曲に感動したことが、作曲の直接的な引き

金となっている。グランドオペラに埋没しそうになっていたパリ楽壇に珍しい大規模な交響曲、しかも今日まで残る大傑作が生まれることとなった。

この交響曲についてはベルリオーズ自身が、「恋に絶望したある感受性豊かな芸術家が、アヘンを吸って自殺を図るものの死に切れず、一連の奇怪な幻想を見ることとなり、それはさまざまな音楽的なイメージとして現れる。彼女はひとつの旋律となり、あたかも固定観念のようにそこかしこに見出される」と当時のプログラムに記している。すなわちこの作品は、ベルリオーズが自身の恋愛体験を交響曲にしてしまったという型破りなものなのである。そのお相手はハリエット・スミツソンというシェークスピア劇団の女優であり、《幻想交響曲》は彼女のために構想された。しかしベルリオーズが一方向的に想いを寄せていたこの関係は一度破綻し、その後ベルリオーズはピアニストのマーリー・モークと恋愛関係に落ちている。しかしこのマーリー・モークは彼女の母親の画策で別の人と結婚してしまい、ベルリオーズは憎しみから一度はこの母娘の殺害を考えるようになる。こうした彼の特徴である感情の激しい高ぶりは、《幻想交響曲》にも遺憾なく発揮されており、この交響曲をベルリオーズの創作という意味でも、また交響曲の創作史の意味でも、特異な地位に押し上げている。なお、その後ベルリオーズとスミツソンの恋は成就し、2人はめでたく結婚する。

「彼女はひとつの旋律になる」というベルリオーズの言葉通り、この作品には「イデー・フィクス(固定楽想)」とよばれる何度も回帰する旋律がある。ある時はソナタ形式の重要な主題として構造的な役割を担い、ある時は物語の筋を進める「引用」として、さまざまに変形しながら装飾的に現れる。

第1楽章〈夢と情熱〉は序奏のついたアレグロ楽章。愛する彼女を見て「火山のような愛情、熱狂、嫉妬」を感じる。**第2楽章〈舞踏会〉**はハーブによる分散和音が導入する優雅なワルツ。とある舞踏会で彼女と再び出会う。**第3楽章〈野の風景〉**は緩徐楽章。イングリッシュ・ホルンと舞台裏のオーボエが吹き交わす牧歌。複数のティンパニが雷鳴を表わす。**第4楽章〈断頭台への行進〉**で「彼は夢の中で彼女を殺し、断頭台に連れて行かれる」。華麗な金管のファンファーレが聴かれる。**第5楽章〈ワルプルギスの夜の夢〉**で彼はサバト(魔女の饗宴)にやってくるが、そこに彼女も現れ加わる。グレゴリオ聖歌(怒りの日)の旋律が現れ、全体のクライマックスを築く。楽章冒頭の弦楽器の不安定な響きからトゥッティに至るまで、作曲家の管弦楽への時代を超えた想像力が十二分に発揮される。

作曲年代	1830年
初演	1830年12月5日、フランソワ・アントワーヌ・アブネック指揮、パリ音楽院管弦楽団
楽器編成	フルート2(ピッコロ1)、オーボエ2(イングリッシュ・ホルン1)、クラリネット2(Esクラリネット1)、ファゴット4、ホルン4、トランペット2、コルネット2、トロンボーン3、チューバ2、ティンパニ2(最大4人で演奏)、大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、小太鼓、ハーブ2(指揮者の意向により今回は4台で演奏)、弦楽、バンダ:オーボエ1、鐘

N響音楽百年史

第八回 — N響の“生みの親” — 山田耕筰伝〈立志篇〉

片山杜秀 — Morihide Katayama

二〇二六年のN響創立百周年に向け、NHK-FM「クラシックの迷宮」のパーソナリティとしてもお馴染みの思想史研究者で音楽評論家の片山杜秀さんが、N響の歴史を時代背景とともに、独自の視点からひもときます。今シーズンには職業オーケストラの黎明期から山田耕筰、近衛秀麿の登場、N響の前身である新交響楽団の誕生までを描く予定です。今回は日本のクラシック音楽の父、そしてN響の生みの親でもある山田耕筰の若き日を描きます。

姉の導きで音楽の道へ

山田耕筰^{こうさく}は1886(明治19)年6月9日、東京市本郷区森川町に生まれた。今の文京区本郷6丁目である。父は山田謙三。謙造とも書く。現在の愛知県知立市^{ちりゅう}のあたりを治める、三河国重原藩の藩士だった。この父は、明治維新で四民平等の世の中になると、慣れない商売をいろいろとやってみた。「士族の商法」である。羽振りのよいときもあった。家族を連れて夜逃げすることもあった。まさに波瀾万丈^{はらんばんじょう}。そのうち病を得て、耕筰が10歳の年に逝った。

父亡き後の少年時代、耕筰はとても苦勞した。昼間は活版所で働き、夜に小学校の勉強をする。活版所と学校と寮がセットになった勤勞学校に入れられたのである。厳しい生活だ。耕筰には無理だったらしい。ついに身体を壊した。長く臥せった。何とか治ってからは、東京駅のボーイとなって、母の暮らしを助けた。学校には行けなくなった。このままずと、貧しい労働者かもしれない。そんな境遇だった。

ところがにわかに光明が射す。耕筰には姉がいた。山田恒^{つね}という。苦學して女学校の教師になった。熱心なクリスチャンでもあった。彼女がイギリス人と結婚した。1898(明治31)年のこと。相手の名はエドワード・ガントレット。ウェールズの名家の出身。アメリカ、カナダを経由し、プロテスタントのメソジスト派の宣教師として来日した。日本メソヂスト教会の本郷中央会堂(今日の本郷中央教会)に所属して宣教しながら、東京高等商業学校(現一橋大学)や麻布中学校などで英語を教えていた。

結婚から3年後の1901(明治34)年。東京で妻と暮らしていたガントレットは、旧制第六高等学校の英語教師に招かれる。旧制高校

は、今日で言うと、大学の1・2年生の課程に相当する。旧制高校は帝国大学と完全にセットになっていた。旧制高校に進学すれば、旧制の帝国大学への入学は自動的に約束される。同じ高校という名前であっても、旧制の高校は、戦後の新制の高校とはまるで違う。しかも、明治の後半だと、高校、大学への進学率は1パーセント程度であろう。旧制高校の教員は、選良中の選良の養成にあたる、重職であり高給取りだった。ガントレットは妻を連れ、第六高等学校のある岡山に赴任した。夫妻の暮らしに余裕ができた。姉は思った。苦労を掛けてきた弟に、ようやくよい教育を与えられる。

ガントレット夫妻は1901年のうちに、15歳になる耕筈を東京から岡山に呼び寄せ、地元よこの学校に入れた。そのときガントレットは義弟の資質がどこにあるかを発見した。音楽である。宣教師のガントレットは教会音楽家でも



エドワードと恒(山田恒)のガントレット夫妻
【アサヒグラフ】1949年新年号(朝日新聞社)

あった。ロンドンで専門教育を受け、合唱の指導も伴奏もできた。本郷の教会ではオルガニストを務めていた。耕筈はというと、幼少時から教会音楽に触れていた。そもそも姉がクリスチャンになったのは、母が信仰心篤く、教会通いをしてきたからである。耕筈も連れていかれた。また、父の謙三が元気な頃には、一家は横須賀で暮らしたこともあった。横須賀は軍港で、海軍軍楽隊が常駐し、市民向けの奏楽もしばしば行われていた。幼い耕筈は軍楽隊の熱烈なファンだった。父の死後に入れられた、耕筈には過酷だった勤労学校もミッション・スクールで、牧師が経営し、生活は讃美歌で満たされていた。耕筈は、教会の合唱と軍楽隊の吹奏楽に育てられたわけだ。貧しくとも西洋音楽への憧れを断ちがたい少年に成長していた。ガントレットはそんな耕筈に音楽の手ほどきをした。学校も、当時は神戸にあったメソジスト派の系統のミッション・スクール、関西学院へ進ませた。音楽的環境に恵まれた学校だった。

東京音楽学校へ進学

耕筈は資質をたちまち開花させていった。1904(明治37)年、関西学院から東京音楽学校(現東京藝術大学音楽学部)の予科へと進学。翌年、同校の本科へ。本科になると専攻を定める。耕筈は声楽だった。積極的にオペラやリートの歌手を目指そうとしたわけではない。耕筈の音楽の夢は岡山時代から作曲にあったようだ。その頃、ガントレットの指導で作曲を始めている。でも、東京音楽学校にはまだ作曲専攻の課程は存在しなかった。それができるのは昭和に入ってから。日本の文明開化は、音楽については、軍隊や宮中を除くと、まずは日

本の義務教育に西洋音楽を取り込むこと、次に西洋人の前でも恥ずかしくなくピアノやヴァイオリンや歌を披露する人材を養成することを、目標とした。つまり教育と演奏である。作曲は入っていなかった。西洋の名曲を理解し演奏できるようになることが先決。教科書に載せる唱歌の旋律と伴奏の作曲くらいなら、専攻の片手間に勉強すればできるようになる。だから長いこと、日本の音楽の最高学府に作曲専攻の課程は設置されないままだった。

耕筈も学校の流儀（なら）に倣った。声楽を学びながら、作曲を勉強した。もちろん学校には作曲を教えられる外国人教師としてラファエル・フォン・ケーベルやルドルフ・ディトリヒやアウグスト・ユンケルがいたし、1907(明治40)年には、そこにハインリヒ・ウェルクマイスターが加わった。ウェルクマイスターはベルリンの高等音楽院を出たばかりの若いチェリストだけれど、作曲もかなりした。耕筈はウェルクマイスターからチェロと作曲を学び、意気投合した。1908年3月に学校の本科を、卒業演奏会でシューベルトの《菩提樹（ぼだいじゆ）》を歌い、弦楽四重奏にチェロで加わってハイドンを弾いて卒業すると、研究科(今日の大学院に相当する)に進み、引き続きウェルクマイスターに師事しながら、表だって作品の発表や演奏活動を行いはじめた。

たとえば、1908(明治41)年6月11日には、東京神田の教会で、ヴァイオリンが多久寅（おののひさとら）と川上淳（かわかみ じゆん）、ヴァイオラが大塚淳（おおくま じゆん）、チェロが山田耕筈というメンバーの弦楽四重奏団が、ボッケリーニやハイドンやモーツァルトを弾き、山田耕筈はチェロだけでなく歌手としても登場してメンデルスゾーンを歌うコンサートが催されている。出演者はみんな、東京音楽学校で学年のあまり変わらなかった学生仲間だ。1909年1月には、同じメンバーの弦楽四重奏団（おおの）が、多クワルテッ

トと名乗って、結成披露の演奏会を神田で行う。このときは600人もの聴衆が集まったという。曲目は、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン、バルギール(クララ・シューマンの弟)のどれかの四重奏曲から、恐らく当時の彼らの技術で弾きやすかった楽章を抜いて組み合わせ、耕筈の歌によるシューベルトと自作の歌曲が加わり、トリはハイドンの《弦楽四重奏曲第77番ハ長調「皇帝」》の、たぶん全曲演奏だった。多クワルテットの十八番と言えば、これはもうハイドンの《皇帝》と相場は決まっていた。

作曲の夢、そして留学へ

耕筈はその頃、どんどん作曲をした。自分で歌うための歌曲ばかりではなかった。合唱曲、あるいは多クワルテットで演奏するための弦楽四重奏曲も連作した。しかし、耕筈の作曲への野心はそうした編成で満たされるものではなかった。日本には既に（ようせつ たきれん たろう）夭折した瀧廉太郎のような先輩もいる。東京音楽学校の系統の作曲家なら、小山作之助や島崎赤太郎のような先達もある。耕筈の同輩や後輩には本居長世（もとおりなが）や信時潔（のぶとききよし）のように作曲を志すライバルたちが登場しつつもある。そして海軍軍楽隊には瀬戸口藤吉、陸軍軍楽隊には永井建子のような、吹奏楽や管弦楽をそれなりによく知った作曲家兼指揮者もいる。

しかし、彼らはみな、日本の現実（じぶ）に縛られすぎている。管弦楽団や吹奏楽団は存在しても、宮廷や官立学校や軍隊のものであり、儀礼や外交や教育や軍隊の宣伝のために用いられるべきものであって、作曲家が個人を表現するための媒体として使うことは困難である。つまり、大きな編成の音楽を作曲家が自らの表現

として創作し発表する場も機会も、明治維新以来半世紀近く経つのに日本にはまだない。それなのに、日本の作曲家たちは、この国の音楽史の段階はまだそんなものだと思い、需要があり、演奏機会も得られる、独唱曲や合唱曲やピアノ曲で満足し、それ以上の編成を作るための研鑽^{けんさん}を積もうともしない。怠惰ではないか。そんな生ぬるいことでは日本文化の進展は望めない!

要するに耕筈は、本格的なオーケストラのための音楽を作曲し、自ら指揮して披露できる作曲家にどうしてもなりたかった。そのためには本物のシンフォニーやオペラを見聞できるところに、すぐにも留学したい。学校の教師として就職してから、ようやく官費留学の機会を与えられるという、当時の日本国家のシステムに唯々諾々と従っていたら、いつになるかわからない。だったら私費で行けばいいのだが、ガンレット夫妻がいくら弟に優しいと言っても、そこまでは無理だ。どうしたらいいのか。

耕筈の夢。それは若者の典型的な誇大妄想かもしれない。時代に先んじてパイオニアたろうとする野心は周囲との軋轢^{あつれき}を生む。変人として爪^{つま}はじきされ、そこで終わる人生も多い。でも、誇大妄想なくして時代は進まない。幸いに耕筈には、山っ気があり、東京の上流階級に、来日以来の短期間で、たちまち人脈を作ってしまった師匠^{せんじょう}がいた。ウェルクマイスターである。彼は耕筈を煽動した。それなら自分も学んだベルリンに留学するのがいちばんだ。自分のチェロの弟子、三菱財閥の次期総帥、岩崎^{こやま}小彌太は、ちょうど、東京フィルハーモニー会を

立ち上げようとしている。東京に、国家のためではない、市民のための西洋クラシック音楽文化を育てようとしている。彼なら君にお金を出すだろう。

ウェルクマイスターの青写真はその通りになった。このドイツ人の根回しがよほどうまくいったのだろう。岩崎小彌太は、まずはシンプルな音楽鑑賞組織として始めようとしている東京フィルハーモニー会を、近い将来、彼がモデルとするヨーロッパの大都市のフィルハーモニー協会のように、自前のホールやオーケストラを持つ組織にまで育てたいと願っていた。小彌太もまた誇大妄想的だった。そのとき必要なのは、自国の作曲家であり指揮者。スターが要るのだ。小彌太はウェルクマイスターの吹き込む「耕筈の才能は圧倒的」との情報信じ、耕筈の未来に賭けた。

1910(明治43)年の春浅き頃、山田耕筈はベルリンに出発した。

文 | 片山杜秀(かたやま もりひで)

思想史研究者、音楽評論家。慶應義塾大学法学部教授。2008年、『音盤考現学』『音盤博物誌』で吉田秀和賞、サントリー学芸賞を受賞。『クラシックの核心』『ゴジラと日の丸』『近代日本の右翼思想』『未完のファシズム』『見果てぬ日本』『五箇条の誓文』で解く日本史』ほか著書多数。

次回予告

今回はよいよ山田耕筈が帰国し、東京フィルハーモニー会管絃楽部が活動を開始。日本のオーケストラ史に輝かしい一歩を記した同会の興亡をたどります。

Overview

1月定期公演

ふたりの名匠で聴く

ドイツ・オーストリア音楽の粋

2020年1月はクリストフ・エッシェンバッハとファビオ・ルイーゼのふたりの名指揮者が登場する。

Aプロはエッシェンバッハの指揮でマーラーの《交響曲第2番「復活」》。ハンナ・エリーザベト・ミュラーのソプラノ、藤村実穂子のメゾ・ソプラノ、新国立劇場合唱団による万全の声楽陣とともに、マーラーの大作に挑む。巨匠エッシェンバ

ハのこと、作品の核心に迫るスケールの大きな演奏を聴かせてくれるにちがいない。

Bプロではファビオ・ルイーゼがリヒャルト・シュトラウスを中心としたプログラムを組んだ。《交響詩「英雄の生涯」》はルイーゼ得意のレパートリー。緻密さと熱さを兼ね備えた名演を期待できそうだ。《4つの最後の歌》では、昨年のローマ歌劇場日本公演の《マノン・レスコー》で会場をわかせた人気ソプラノ、クリスティーン・オポライズがN響と初共演を果たす。

Cプロはエッシェンバッハによるブラームス。エッシェンバッハは前回の共演で4つの交響曲を指揮したが、今回はその続編ともいべき《ピアノ協奏曲第2番》とシェーンベルク編曲による《ピアノ四重奏曲第1番》の組み合わせ。協奏曲では同曲のレコーディングでも共演する盟友ツイモン・バルトが独奏を務める。

[飯尾洋一／音楽ジャーナリスト]

A

1/11(土) 6:00pm

1/12(日) 3:00pm

NHKホール

マーラー／交響曲 第2番 ハ短調「復活」

指揮：クリストフ・エッシェンバッハ
ソプラノ：ハンナ・エリーザベト・ミュラー
メゾ・ソプラノ：藤村実穂子
合唱：新国立劇場合唱団

B

1/22(水) 7:00pm

1/23(木) 7:00pm

サントリーホール

ウェーバー／歌劇「オイリアンテ」序曲

R. シュトラウス／4つの最後の歌

R. シュトラウス／交響詩「英雄の生涯」作品40

指揮：ファビオ・ルイーゼ
ソプラノ：クリスティーン・オポライズ

C

1/17(金) 7:00pm

1/18(土) 3:00pm

NHKホール

ブラームス／ピアノ協奏曲 第2番 変ロ長調 作品83

ブラームス(シェーンベルク編)／ピアノ四重奏曲 第1番 ト短調 作品25

指揮：クリストフ・エッシェンバッハ
ピアノ：ツイモン・バルト

2020年7月4日[土] 5:00pm | サントリーホール 2020 July 4 (Sat) 5:00pm
Suntory Hall
Widmann "Arche,"
oratorio (2017)
[Japan Première]

指揮：ケント・ナガノ

ソプラノ：マルリス・ペーターゼン

バリトン：トーマス・E. バウアー

合唱：新国立劇場合唱団、アウディ・ユーゲント合唱団

児童合唱：NHK東京児童合唱団 ほか

Kent Nagano, conductor

Marlis Petersen, soprano

Thomas E. Bauer, baritone

New National Theatre Chorus,

Audi Jugendchorakademie, chorus

NHK Tokyo Children Chorus, children's chorus etc.

新連載予告

ケント・ナガノ & N響が贈る

ケント・ナガノ



© Felix Brodke

日本初演に向け、
来月号より特別連載が始動！

《オラトリオ「箱舟」》

Widmann
"Arche," oratorio



© Marco Borggreve

イェルク・ヴイトマン

古い世界の終わりと、新しい世界への「希望」の物語 | ケント・ナガノ

ドイツの現代作曲家イェルク・ヴイトマンによる《オラトリオ「箱舟」》。2017年、ドイツ・ハンブルクのエルプフィルハーモニー落成記念に、ケント・ナガノの指揮で世界初演されました。ソリストと合唱団を含む総勢約300名によって演奏されたこの超大な作品の中心にあるのは「神と人間との葛藤」。さまざまな時代のテキストを織り交ぜながら、人間と神の関係についての壮大な物語が描かれます。来年7月にそのケント・ナガノが世界初演時のソリストを引き連れ、N響とともに日本初演を行います。この大作を紐解くべく、『フィルハーモニー』1月号より、特別連載をスタート！公演の全貌や出演者、作品の世界など、《箱舟》の魅力にあらゆる方面から迫っていきます。

チケット発売日

発売開始：3月1日[日] 10:00am

N響定期会員先行発売：2月26日[水] 10:00am

※チケット料金などの詳細は後日発表

A

Concert No.1927 NHK Hall

November 30(Sat) 6:00pm

December 1(Sun) 3:00pm

conductor/ harpsichord • | Masato Suzuki

cello | Nicolas Altstaedt*

concertmaster (guest) | Vesko Eschkenazy*

◆**Vesko Eschkenazy:** Vesko Eschkenazy was born in Bulgaria in 1970, and completed his studies at the Guildhall School of Music in London in 1992. He has been Concertmaster of the Royal Concertgebouw Orchestra since 2000, while also performing with Ludmil Angelov as a duo. After his first appearance as its guest concertmaster in November 2011, he has often returned to the NHK Symphony Orchestra.

Olivier Messiaen

Les offrandes oubliées [11']

Ernest Bloch

"Schelomo," hebraic rhapsody*

[20']

— intermission (20 minutes) —

Arcangelo Corelli/ Masato Suzuki

Concerto grosso No. 8 G Minor

"Fatto per la notte di Natale" • [13']

I Vivace–Grave–Allegro

II Adagio–Allegro–Adagio

III Vivace

IV Allegro–Pastorale: Largo

Felix Mendelssohn Bartholdy

Symphony No. 5 D Minor Op. 107

"Reformation" (First Version/ 1830)

[28']

I Andante–Allegro con fuoco

II Allegro vivace

III Andante

IV Andante con moto–Allegro vivace–Allegro
maestoso

A

30. NOV. & 1. DEC. 2019

Masato Suzuki, conductor



Masato Suzuki is an artist with many faces—conductor, composer, pianist, harpsichordist and organist, however, for audiences who gather for the NHK Symphony Orchestra's concerts, he may be most remembered for his organ solo performances of Copland (in November 2018) and Saint-Saëns (in May 2019). He has a vast repertoire ranging from the medieval and the Renaissance to the 21st Century to which

he has a strongly-motivated approach. He also has a diverse way of tackling such works, sometimes acting as a musician, sometimes as a producer, a stage director or a trainer to enjoy the challenge of each work. He was born in Holland in 1981, and after graduating from the Tokyo University of the Arts where he studied composition, and then early music during his postgraduate course, he went on to study the organ and improvisation at the Royal Conservatory in The Hague. In 2005, he formed Ensemble Genesis, performing works of different ages with period instruments. In recent years, he has been taking the lead of the Chofu International Music Festival as its Executive Producer. He became Principal Conductor of Bach Collegium Japan in September 2018. He thoroughly demonstrates his capabilities in early music, his foothold.

Nicolas Altstaedt, cello



Nicolas Altstaedt, known for his beautiful sounds and versatile technique, was born into a family of German and French descent. Being a multitalented artist, he also serves as a conductor and artistic director along with soloist. He studied under Boris Pergamenschikow, a renowned cellist, and became one of his last students. He won the Credit Suisse Young Artist Award in 2010 which allowed him collaborate

with the Wiener Philharmoniker under Gustavo Dudamel at the Lucerne Festival. After that, he has made numerous appearances, performing in recitals and chamber music concerts in the world's famed concert halls including Carnegie Hall and Wigmore Hall, as well as working with celebrated orchestras under Roger Norrington, Neville Marriner and Vladimir Ashkenazy, and in the 2018/19 season, he served as Artist in Residence at the NDR Elbphilharmonie Orchester. He assumed the position of Artistic Director of the Lockenhaus Chamber Music Festival to succeed Gidon Kremer in 2012, and then later of the Haydn Philharmonie from 2014, with which he made a Japan tour in 2018 and gave a lively performance.

This is his first appearance with the NHK Symphony Orchestra.

[Masato Suzuki by Natsuki Sawatani, music critic, Nicolas Altstaedt by Katsuhiko Shibata, music critic]

Olivier Messiaen (1908–1992)

Les offrandes oubliées

Olivier Messiaen composed his *Les offrandes oubliées* (*The Forgotten Offerings*) in 1930, a year after he was awarded with first prize in composition from the Paris Conservatory. The piece premiered on February 19, 1931 at the *Théâtre des Champs-Élysées*, with Walther Straram conducting his orchestra *l'Orchestre des concerts Straram*. The work is the first of a series of religious compositions for orchestra with no vocal parts. It is a programmatic composition about people in modern times neglecting the sacrifice Christ made. Messiaen has written a poem explaining the piece: “Arms outstretched, afflicted unto death, you shed your blood on the cross. We have forgotten, sweet Jesus, how you love us.” Messiaen was after all a devout Roman Catholic and worked as a church organist throughout much of his musical career. The piece consists of three sections, titled “*La croix* (*The Cross*),” “*Le péché* (*Sin*),” and “*L'eucharistie* (*The Eucharist*).” The slow first section depicts Christ’s Crucifixion, and the fierce second, man’s descent into sin. The gentle third section is about the promise of salvation offered by the Eucharist.

Ernest Bloch (1880–1959)

“Schelomo,” hebraic rhapsody

The American composer Ernest Bloch was born in Geneva, Switzerland in 1880. He went to Brussels in 1896 to study music — his teachers there included a well-known Belgian violinist Eugène Ysaÿe. He then went to other important musical centers of Europe to study. He was in Frankfurt am Main in 1899 and in Munich in 1901. In 1910, he premiered at the *Théâtre national de l’Opéra-Comique* in Paris his opera *Macbeth*, which took him five years to complete. This, however, was not received well. In 1916, Bloch left Europe and settled down in the United States of America, acquiring American citizenship in 1924.

Bloch’s *Schelomo* was completed in 1916 and premiered on May 3, 1917 at New York’s Carnegie Hall. The composition was regarded highly; for instance, the *San Francisco Chronicle* wrote: “*Schelomo* is a magnificent work by one of the greatest living composers.” The piece was first conceived as a vocal piece, but Bloch eventually decided to write it for solo cello and orchestra. The soloist represents the voice of *Schelomo*, the biblical figure King Solomon in the Old Testament. The work comprises three sections, the first two exhibiting distinctive thematic melodies. In the final section, however, Bloch avoids introducing new thematic materials, choosing instead the melodic figures of the previous sections to develop the final part of the piece.

Arcangelo Corelli (1653–1713)/ Masato Suzuki (1981–)

Concerto grosso No. 8 G Minor “Fatto per la notte di Natale”

Arcangelo Corelli was one of the most influential composers of the late Baroque period. His published works were widely circulated not only in Italy but also in numerous countries in Europe. As a result, many composers in the first half of the eighteenth century simply imitated Corelli’s compositional style. His only collection of *concerto grossi* was published posthumously

in 1714 as his Op. 6. The G-minor concerto is the eighth work in it, bearing the inscription “*Fatto per la notte di Natale (Made for Christmas Eve)*.” Just like his other concertos, the *Christmas Concerto* is scored for two groups of instruments, one (*concertino*) comprises two solo violins and a solo cello (with basso continuo accompaniment), the other (*ripieno*), four-part strings and basso continuo. The final movement is a *pastorale*, a type of music strongly associated with Christmas. The version performed for the 2019–20 season of the NHK Symphony Orchestra is an arrangement made by Masato Suzuki, who added two oboes and a bassoon to the original score.

Felix Mendelssohn Bartholdy (1809–1847)

Symphony No. 5 D Minor Op. 107 “Reformation” (First Version/ 1830)

Despite the designated number of the work, Felix Mendelssohn’s Symphony No. 5 in D Minor, Op. 107 *Reformation* is not one of his late works. Mendelssohn began composing it in 1829 in England when he was just twenty years old. The piece was completed the following year in Berlin. Prior to it the composer had written only one symphony that calls for a full orchestra (Symphony No. 1 in C Minor, Op. 11, completed in 1824). The reason why the *Reformation* symphony became known as his fifth is because it was not published until 1868, twenty-one years after his death. Upon the completion of the symphony, Mendelssohn attempted to premiere it in Paris, but he was turned down apparently because the piece was too difficult to understand. He then revised it and premiered it in 1832. The *Reformation* symphony is scored for two flutes, two oboes, two clarinets, two bassoons, contrabassoon, two French horns, two trumpets, three trombones, timpani, and strings. The original score indicates that the contrabassoon part is expected to be played together with a serpent, a rather antiquated brass-like instrument that was first developed in the Renaissance era. Today, the serpent is usually omitted or replaced by tuba when the symphony is performed.

Mendelssohn originally intended the *Reformation* symphony to be performed at the tercentennial celebration of the Augsburg Confession. The composition, therefore, incorporates Martin Luther’s chorale “*Ein’ feste Burg ist unser Gott (A Mighty Fortress is Our God)*.” This hymn had been well known, and numerous composers set music to it, including Johann Sebastian Bach. The *Reformation* symphony comprises four movements. The first begins with a slow introduction, in which Mendelssohn quotes the so-called “Dresden Amen,” a peculiar manner of singing Amen in Dresden since the eighteenth century. The main section of the movement is in D minor instead of the D major in the introduction. The opening theme returns to conclude the movement. The second movement is a brightly sounding minuet or scherzo with a trio. The slow third movement is relatively short, retaining a singing quality initiated by the first violin at the beginning. Here Mendelssohn also writes melodies sounding like *recitativi* of the eighteenth century operas and cantatas. After a brief introduction, the finale begins with the chorale “*Ein’ feste Burg ist unser Gott*” played by woodwinds. This chorale tune can be heard throughout the movement, and Mendelssohn brings it back for the last time at the end to conclude this magnificent movement and symphony.

Akira Ishii

Professor of Keio University. Visiting Scholar at the Free University Berlin between 2007 and 2009. Holds a Ph.D. in Musicology from Duke University (USA).

B

Concert No.1929 Suntory Hall

December

11 (Wed) 7:00pm

12 (Thu) 7:00pm

conductor | Pablo Heras-Casado

piano | Daniel Kharitonov

concertmaster | Ryotaro Ito

Nikolai Rimsky-Korsakov

Capriccio espagnol Op. 34 [15']

- I Alborada
- II Variazioni
- III Alborada
- IV Scena e canto gitano
- V Fandango asturiano

Franz Liszt

Piano Concerto No. 1 E-flat Major [19']

- I Allegro maestoso
- II Quasi adagio

III Allegretto vivace

IV Allegro marziale animato

— intermission (20 minutes) —

Peter Ilich Tchaikovsky

Symphony No. 1 G Minor Op. 13
"Rêves d'hiver" [44']

- I Rêve d'un voyage d'hiver: Allegro tranquillo
- II Pays désolé, pays brumeux: Adagio cantabile ma non tanto
- III Scherzo: Allegro scherzando giocoso
- IV Finale: Andante lugubre—Allegro maestoso

Artist Profiles

Pablo Heras-Casado, conductor



© Dario Acosta

Pablo Heras-Casado enjoys an unusually varied and broad-ranging career, encompassing the great symphonic and operatic repertoire, historically informed performances, and contemporary scores.

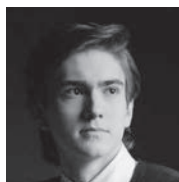
Born in Granada, he won the Lucerne Festival Conductor's Competition in 2007, and conducted the world premiere performance of opera *Matsukaze* by Toshio Hosokawa at the Monet Theatre in 2011.

That same year he began his six years tenure as Principal Conductor of the Orchestra of St. Luke's and made his debut with the Berliner Philharmoniker. Since then he is regularly invited every season to many prestigious orchestras around the world, being distinguished as Musical

America's 2014 Conductor of the Year. In 2019 Heras-Casado started his first-ever complete Wagner's *Ring Cycle*, spanning four consecutive seasons at Teatro Real in Madrid, where he is Principal Guest Conductor. He also has planned productions this season with Berliner Staatsoper. He is Director of the Granada Festival, and enjoys a long-term collaboration with Freiburger Barockorchester, featuring extensive touring and recording projects.

His first collaboration with the NHK Symphony Orchestra was in 2009 when he conducted *Gruppen* by Karlheinz Stockhausen at Suntory Summer Festival. In 2011, he made his appearance at Music Tomorrow. This is his first appearance in the orchestra's subscription concert series.

Daniel Kharitonov, piano



Daniel Kharitonov, a 20-year old pianist of distinction, was born in Yuzhno-Sakhalinsk in the Russian Far East. In 2015, he was awarded 3rd prize in the 15th International Tchaikovsky Competition at the age of 16, and suddenly stole the global limelight. At the age of 14, he had already made his debut with the Mariinsky Orchestra under Valery Gergiev as well as at Carnegie Hall as part of the Musical Olympus

International Festival gala concert. He has held recitals at renowned concert halls in Russia including the Tchaikovsky Concert Hall and the Grand Hall of the Moscow Conservatory while in France he appeared at the Annecy Music Festival. Until now, he has worked with major Russian orchestras including the Russian National Orchestra, the Tchaikovsky Symphony Orchestra (formerly the Moscow Radio Symphony Orchestra), the National Symphony Orchestra of Ukraine and the Moscow Philharmonic Orchestra as well as the China Philharmonic Orchestra, the Guangzhou Symphony Orchestra and the São Paulo Symphony Orchestra. In April 2019, he worked with the Philharmonia Orchestra to great artistic acclaim. He has held recitals in Japan since 2015. This is his first collaboration with the NHK Symphony Orchestra.

[Pablo Heras-Casado by Atsufumi Suzuki, music critic, Daniel Kharitonov by Arisa Iida, music facilitator]

Program Notes | Akira Ishii

Nikolai Rimsky-Korsakov (1844–1908)

Capriccio espagnol Op. 34

After composing the violin concerto-like *Concert Fantasy on Russian Themes*, Op. 33, Rimsky-Korsakov wanted to write another similar composition featuring solo violin, this time with Spanish elements. According to his autobiography, however, he soon abandoned the idea and “decided instead to compose an orchestral piece with virtuoso instrumentation.” Rimsky-Korsakov’s *Capriccio espagnol* (*Spanish Capriccio*), Op. 34 indeed includes numerous solo passages that are difficult to be executed. They are written for a variety of instruments including violin, flute, clarinet, French horn, and trumpet. These solos certainly enhance the attractiveness of the composition.

Rimsky-Korsakov composed his *Capriccio espagnol* in 1887, premiering it later that year in St. Petersburg on November 12. When the piece was published for the first time in Leipzig the following year, the composition was dedicated to the musicians of the Imperial Opera in St. Petersburg. The work is based on Spanish dance tunes and comprises five movements, titled *Alborada*, *Variazioni* (*Variations*), *Alborada, Scena e canto gitano* (*Scene and Gypsy Song*), and *Fandango asturiano*. The first and third movements, both vigorous dances, are nearly identical but with different orchestrations and tonality. The final movement is also an energetic dance, recalling numerous thematic materials of the previous movements.

Franz Liszt (1811–1886)

Piano Concerto No. 1 E-flat Major

Franz Liszt's Piano Concerto No. 1 in E-flat Major, one of the most frequently performed piano concertos in modern times, has a rather long history. Liszt begun composing the piece around 1830 and kept working on it on and off for more than twenty years. It was not until the end of the 1840s that Liszt started to shape the concerto into its currently known form. By this time, Liszt, a renowned virtuoso piano performer, had come to be recognized as a composer and begun to write, in addition to piano pieces, numerous orchestral compositions. Moreover, he was persuaded around this time to give up his concert career, which had required him to travel a countless number places in the entire Europe. In 1848, he finally settled down in Weimar, where he had been appointed as *Kapellmeister* in 1842, to conduct the court orchestra there. His new career allowed him to spend more time composing. As a result, he wrote most of his symphonic poems during his twelve-year tenure at the Weimar court. The piano concerto was also completed during this period. Its premiere took place on February 17, 1855 at the Ducal Palace in Weimar, with Hector Berlioz conducting the Court Orchestra and the composer playing the solo part. After this performance Liszt made revisions between 1855 and 1856. The work is scored for solo piano, two flutes, piccolo, two oboes, two clarinets, two bassoons, two French horns, two trumpets, three trombones, timpani, triangle, cymbals, and strings.

The whole of Liszt's Piano Concerto No. 1 is developed with a single theme, which the composer transforms to different figures and motives, a type of compositional technique that can be regarded as an extended manner of writing variations. The concerto comprises four short movements, each indicated with distinctive tempo markings: *Allegro maestoso*, *Quasi adagio*, *Allegretto vivace–Allegro animato*, and *Allegro marziale animato*. This four-part structure somewhat resembles typical symphonies of the time due to its fast-slow-scherzo-fast scheme. The opening movement begins with the profoundly stated theme presented by the strings in unison. The solo piano follows right away and plays a short cadenza after briefly stating the theme of its own. The mood and tempo are frequently altered in this movement; for instance, a sweet cadenza-like segment in a major key, which makes a sharp contrast to the opening theme, appears a few times. The slow second movement mostly consists of a lyrical melody, stated first by solo piano. Here too, however, the sonority is not maintained throughout; intensive phrases that reflect the main theme often appear. The scherzo-like third movement in triple meter is characterized by the triangle strokes. The finale displays both lyrical and majestic sound qualities, but all playful and virtuosic. In the ending measures of the piece, written in a major key, Liszt still retains the musical ideas that initiated the whole piece.

B

11 & 12 DEC 2019

Symphony No. 1 G Minor Op. 13 “Rêves d’hiver”

Tchaikovsky’s Symphony No. 1 in G Minor, Op. 13 *Rêves d’hiver* (*Winter Dreams*) was composed in 1866 when he had just started his career in music. Tchaikovsky had been learning how to play piano since he was five years old, but he received no formal training in music until he began working as a civil servant. In 1861 he attended a music theory class at the Russian Musical Society, which became the St. Petersburg Conservatory in 1862. The following year, he resigned his post at the Ministry of Justice to concentrate on his studies. At the Conservatory he learned harmony and counterpoint with Nikolai Zarembo and instrumentation and composition with Anton Rubinstein. Upon graduating from the Conservatory in 1865, Tchaikovsky was offered by Nikolai Rubinstein, a brother of Anton’s, a teaching position at the Russian Musical Society in Moscow, which would later become the Moscow Conservatory. Tchaikovsky moved to Moscow in 1866.

Acting upon the suggestion of Nikolai Rubinstein, one of the founding members of the Russian Musical Society as well as of the Moscow Conservatory, Tchaikovsky began to compose his Symphony No. 1 soon after arriving in Moscow. The first version of the symphony was written mostly during the spring and summer of 1866. He then revised it later that year partly because his former teachers in St. Petersburg disapproved of it. In December 1866, the Scherzo third movement was included in a program of a concert of the Moscow Russian Music Society. The event, however, was unsuccessful. The following year in February, the Adagio second movement, together with the Scherzo, was performed in St. Petersburg. Tchaikovsky, however, had to wait until the year 1868 for the whole of the symphony to be presented to the public. This “premiere” in Moscow went well. Tchaikovsky was fully aware that the first symphony met with an enthusiastic reception but was never completely satisfied with it. He then reworked the symphony during the spring of 1874. This version was performed for the first time in 1883.

The *Winter Dreams* symphony consists of four movements, of which the first two are titled *Rêve d’un voyage d’hiver* (*Dreams of a Winter Journey*) and *Pays désolé, pays brumeux* (*Land of Desolation*). Unlike his other early symphonies that were nicknamed by others, it was Tchaikovsky who named the first symphony as well as its first two movements. These titles, however, do not seem to suggest the piece being programmatic — they rather bespeak the mood of the work. The first movement opens with a melancholic theme stated by flute and bassoon in octave. This is answered right away by violas. The movement also displays numerous chromatically progressed thematic motives and figures. Together with the main theme, they are developed throughout the movement. The main melody of the slow second movement is stated first by the muted violins, violas, and cellos. Then the peacefully but somewhat sorrow sounding oboe takes over to set up the general mood of the movement. After the Scherzo movement, the finale begins with a brief introduction, followed by a fast section that features syncopated rhythms as well as thematic transformations and contrapuntal developments. The symphony is scored for piccolo, two flutes, two oboes, two clarinets, two bassoons, four French horns, two trumpets, three trombones, tuba, timpani, cymbals, bass drum and strings.

Akira Ishii | For a profile of Akira Ishii, see p.54

C

Concert No.1928 **NHK Hall****December****6(Fri) 7:00pm****7(Sat) 3:00pm**conductor | **Diego Matheuz**violin | **Nikita Boriso-Glebsky**concertmaster (guest) | **Vesko Eschkenazy** | for a profile of Vesko Eschkenazy, see p.51

Felix Mendelssohn Bartholdy
“Ein Sommernachtstraum,”
overture Op. 21 [12’]

Aleksandr Glazunov
Violin Concerto A Minor Op. 82 [21’]

- I Moderato
- II Andante sostenuto
- III Allegro

— intermission (20 minutes) —

Hector Berlioz
Symphonie fantastique Op. 14 [50’]

- I Rêveries–Passions
- II Un bal
- III Scène aux Champs
- IV Marche au Supplice
- V Songe d’une Nuit de Sabbat

C

6 & 7, DEC. 2019

Artist Profiles**Diego Matheuz, conductor**

Diego Matheuz is a conductor born in Barquisimeto, Venezuela in 1984, and brought up in El Sistema, a music education program unique to Venezuela which has been noted for sending Gustavo Dudamel to the world. He learned the violin and after serving as concertmaster of the Orquesta de la Juventud Venezolana Simón Bolívar (presently known as the Orquesta Sinfónica Simón Bolívar), he became a conductor. In 2009,

his talent having been discovered by Claudio Abbado, he became Principal Guest Conductor of the Orchestra Mozart Bologna founded by Abbado himself, and from 2011 to 2015, he served as Principal Conductor of Teatro La Fenice, and then Principal Guest Conductor of the Melbourne Symphony Orchestra from 2013 to 2016.

Until now he has conducted numerous renowned orchestras including the Los Angeles Philharmonic, the Philharmonia Orchestra and the Israel Philharmonic Orchestra, and guest-conducted operatic works at the Berliner Staatsoper, the Deutsche Oper Berlin and the Teatro Regio di Torino as well as at the Rossini Opera Festival. In Japan he has often conducted the Saito Kinen Orchestra since 2011, while with the NHK Symphony Orchestra, he first worked in March 2013, and then conducted its subscription concert series in November 2015.

Nikita Boriso-Glebsky, violin



Nikita Boriso-Glebsky was born in 1985 in Russian city of Volgodonsk, entered into the tutelage of Eduard Grach and Tatiana Berkul at the Moscow Conservatory, and then went onto further studies with Augustin Dumay at the Chapelle Musicale Reine Elisabeth in Belgium and with Ana Chumachenco at the Kronberg Academy. He won second prize at the 2007 International Tchaikovsky Competition, and first prize at the International Jean Sibelius Violin Competition in Helsinki and the International Fritz Kreisler Violin Competition in Vienna in 2010.

He has worked with major orchestras including the Mariinsky Orchestra, the State Academic Symphony Orchestra “Evgeny Svetlanov”, the Belgian National Orchestra, the Helsinki Philharmonic Orchestra, the Lahti Symphony Orchestra, the Moscow Philharmonic to name a few. In July 2017, he worked with the NHK Symphony Orchestra performing Tchaikovsky’s Violin Concerto. Since 2014, he has also actively been engaged as a member of the Rubik Ensemble made of string quintet and piano. His discography includes the Lalo Symphonie espagnole with the Sinfonia Varsovia under Augustin Dumay, and Complete Works for Violin and Piano of Nikolai Medtner.

[Diego Matheuz, Nikita Boriso-Glebsky by Haruo Yamada, music critic]

Program Notes | Akira Ishii

Felix Mendelssohn Bartholdy (1809–1847)

“Ein Sommernachtstraum,” overture Op. 21

Mendelssohn’s Overture to *Ein Sommernachtstraum* (*A Midsummer Night’s Dream*), Op. 21 was completed on August 6, 1826 when Mendelssohn was only seventeen years old. The first run through of the work took place at the house of Abraham Mendelssohn (Felix’s father) in Berlin on August 26, 1826. The piece was presented to the public for the first time on February 20 of the following year in Stettin (today’s Szczecin in Poland). It is scored for two flutes, two oboes, two clarinets, two bassoons, two French horns, two trumpets, ophicleide, timpani, and strings. For the ophicleide part, Mendelssohn originally called for English bass horn (*corno inglese di basso*), which was a variation of serpent, a brass-like instrument first developed in the Renaissance era. Mendelssohn decided to replace it with the ophicleide when

the overture was published (the ophicleide is a low brass instrument, whose appearance is somewhat similar to a large saxophone). Today, the instrument is no longer in use, and the part is usually performed by the tuba.

Mendelssohn succeeded in capturing the spirit of Shakespeare's play in the overture (the play, set in the forest where fairies live, is about the marriage of Theseus, the Duke of Athens, to Hippolyta, the Queen of the Amazons and the four-day wedding festivity with pomp and entertainment). It begins with a sequence of softly sounding sustained chords played by woodwinds and French horns. The sonority here is rather mystique, since the tonality is not fully established. The first measure, for instance, consists of just two notes E and G-sharp, which can be a part of either an E-major or a C sharp-minor triad. The second chord is a dominant of the E major, but Mendelssohn writes an A-minor chord in the following measure, a chord that does not belong to the key of E major. The brief introduction ends with the strings playing an E minor chord. The harmonic progression here with the undetermined direction presages many modal shifts between major and minor keys in the overture.

Aleksandr Glazunov (1865–1936)

Violin Concerto A Minor Op. 82

Born in 1865, Alexander Glazunov was one of the most influential figures of the Russian composers of the Romantic Era. He was a prolific composer, writing three ballets, eight symphonies not counting an unfinished one, and a high number of other types of orchestra pieces such as overtures and waltzes. He also wrote a variety of chamber music pieces including those for piano solo. Glazunov was a child prodigy on piano but also exhibited his talent for composing at an early age. Glazunov was introduced to Nikolai Rimsky-Korsakov when he was only fourteen years old. Rimsky-Korsakov, the leading composer of the time, looked at a score of an orchestral piece by the young composer and was astonished by the quality of Glazunov's talent. In 1899, Glazunov became a professor at the St. Petersburg Conservatory and assumed its directorship in 1905. Glazunov was also active as a conductor. In the final years of his life, he stayed away from his native Russia and resided in France, where he died in 1936.

Glazunov composed his Violin Concerto in A Minor, Op. 82 in 1904. It premiered in St. Petersburg on March 4, 1905, conducted by the composer. The solo violinist was Leopold Auer, to whom the composition was dedicated (Auer was professor of violin at the St. Petersburg Conservatory, having taught renowned violinists such as Jascha Heifetz, Nathan Milstein, Mischa Elman, and Efeim Zimbalist). The concerto is not a long composition. It comprises three sections (movements) — scholars have also suggested that it consists of four — that are performed without interruption. Right after the opening chord played by pizzicato strings and French horns in *piano*, the solo violin enters to introduce the main theme. The melody here, accompanied first by the clarinets and the bassoon playing repetitive notes in triplets, retains Russian sonority, producing a melancholic and serene atmosphere. The theme is unusually long, lasting more than sixteen measures. Glazunov develops this, together with a tranquil melody that is loosely treated as the second theme, to develop the musical ideas throughout the entire concerto. Much of the second (middle) section is a cadenza of a considerable length for the violin solo. It contains a variety of figures, with which the soloist can exhibit a full range of violin technique. The cadenza serves as a transition from the emotionally intense segments to the brilliantly sounding finale in a major key.



6 & 7, DEC. 2019

Symphonie fantastique Op. 14

The most notable feature of Hector Berlioz's *Symphonie fantastique*, Op. 14 is its programmatic element. Since the beginning of the seventeenth century, composers had been making a particular effort to ameliorate instrumental music. It is not easy to write such a piece that is fully comprehensible to all listeners as well as to performers. If an instrumental composition lacks a formal structure or does not connote a meaning or situation, however vague, rhetorical, or imaginative that might be, it would just become a collection of randomly placed sounds. To avoid this, composers developed musical language either through exploring and refining harmony or finding and trying new methods to communicate. They also paid attention to musical forms that would help persuade audiences of their artistic inspiration.

In the nineteenth century, many composers became attracted to program music partly because they were influenced by the Romantic notion of incorporating elements of different arts such as literature and painting into their works. Hector Berlioz was one of them, composing his most representative program work *Symphonie fantastique* in 1830. In the preface of the first edition of the piece published in 1845, he says, "the composer's intention has been to develop various episodes in the life of an artist, in so far as they lend themselves to musical treatment." The composition is indeed about the story of an artist in love, often having wild imaginations caused by opium. It was actually about Berlioz himself, who fell in love with the actress Harriet Smithson.

The programmatic connotations of each of the five movements of the piece have been described by Berlioz. In the first movement, titled *Rêveries – Passions (Daydreams, Passions)*, a young musician "sees for the first time a woman who unites all the charms of the ideal person his imagination was dreaming of, and falls desperately in love with her." The second movement, *Un bal (A Ball)*, is a waltz depicting the artist "in the tumult of a festive party." Towards the end of the movement, the music becomes rather chaotic because "the beloved image keeps haunting him and throws his spirit into confusion." The third movement, titled *Scène aux Champs (Scene in the Countryside)*, begins peacefully and is filled with pastoral sonority because the artist "hears two shepherds in the distance dialoguing with their 'ranz des vaches.'" The agitated feeling of the artist is also introduced when he wonders whether his love betrays him. In the fourth movement, titled *Marche au Supplice (March to the Scaffold)*, the artist becomes more delusional, and he is now "convinced that his love is spurned." He then "poisons himself with opium." The artist eventually witnesses "his own execution." In the finale, titled *Songe d'une Nuit de sabbat (Dream of a Witches' Sabbath)*, Berlioz continues to depict the artist's strange visions. The artist "sees himself at a witches' sabbath, in the midst of a hideous gathering of shades, sorcerers and monsters of every kind who have come together for his funeral."

Berlioz's *Symphonie fantastique* calls for a large orchestra, which includes a pair of cornets and ophicleides. These instruments had been new to not only Berlioz but also to the audiences of the time. The ophicleide, a low brass instrument, was created in France in 1817 (in modern performances it is replaced by tuba), and the cornet, a short trumpet with valves or pistons, in the 1820s. In short, *Symphonie fantastique*, with its programmatic contents as well as its previously unknown instruments, must have sounded new and original when it was performed for the first time on December 5, 1830.

Akira Ishii | For a profile of Akira Ishii, see p.54



Aプロのショスタコーヴィチ《交響曲第11番「1905年」》。コンサートマスターはライナー・キュヒルが務めた(10月5日)

公演報告

2019年 10 定期公演

月

SUBSCRIPTION CONCERTS
IN OCTOBER, 2019

10月定期公演は井上道義、トゥガン・ソヒエフの2人の指揮者が登場。井上はN響の2人の首席ティンパニ奏者をソロに配したグラスの作品と、ライフワークとするショスタコーヴィチの交響曲から《第11番》を披露。一方ソヒエフはBプロではフランス近代音楽、Cプロではロシア音楽と、それぞれ明確なテーマのもと、多彩な音楽を繰り広げました。

Aプログラム グラス／2人のティンパニストと管弦楽のための協奏的幻想曲(2000)、ショスタコーヴィチ／交響曲 第11番ト短調 作品103「1905年」(2019年10月5、6日、NHKホール)
Bプログラム ベルリオーズ／劇的物語「ファウストのごう罰」から「鬼火のメヌエット」[「ハンガリー(ラコツィ)行進曲」、ビゼー／交響曲 第1番 八長調、ドビュッシー／牧神の午後への前奏曲、ベルリオーズ／劇的交響曲「ロメオとジュリエット」作品17(抜粋)(2019年10月23、24日、サントリーホール) **Cプログラム** バラキレフ(リャプノーフ編)／東洋風の幻想曲「イスラメイ」、ラフマニノフ／バガニエの主題による狂詩曲 作品43、チャイコフスキー／交響曲 第4番 へ短調 作品36(2019年10月18、19日、NHKホール)



(左) Aプロの指揮を執った井上道義

(下) Aプロのグラス《2人のティンパニストと管弦楽のための協奏的幻想曲》でソリストを務めた植松透(左)と久保昌一(右)(いずれも10月5日)





(上) Bプロのベルリオーズ《劇的交響曲「ロメオとジュリエット」》

(左) B・Cプロの指揮を務めたトッガン・ソヒエフ

(いずれも10月23日)



(右) Cプロのラフマニノフ《バガニーニの主題による狂詩曲》で
ピアノ独奏を務めたニコラ・アンゲリッシュ

(下) Cプロのチャイコフスキー《交響曲第4番》

(いずれも10月18日)





モーツァルト《レクイエム》。新国立劇場合唱団(合唱指揮: 富平恭平)が出演

公演報告

NHK音楽祭2019

2019年10月10日、NHKホール

NHK MUSIC FESTIVAL 2019

世界中から高い評価を得る指揮者とオーケストラが集まる「NHK音楽祭」。

今年、N響は古楽界の巨匠トン・コープマンと世界屈指の歌手たちとともに出演。

《交響曲第40番》《レクイエム》からなるモーツァルト後期の短調作品を披露し、

躍動感と味わい深さを兼ね備えた演奏で会場に大きな感銘を残しました。

モーツァルト／交響曲 第40番 短調 K. 550

モーツァルト／レクイエム K. 626

写真提供：NHK音楽祭2019

(左)《レクイエム》の独唱者たち。左から、クラウス・メルテンス(バス)、ハトリック・グラール(テノール)、
イツァベル・アリアス・フェルナンデス(ソプラノ)、藤木大地(アルト)。コンサートマスターはライナー・キュッヒルが務めた
(右)指揮を執ったトン・コープマン

